株式会社 地域環境計画

1996 JULY
NO.4

News Letter

「昔はいたけど…」

しっとりとまとわりつくような湿った空気の中、薄暗くなった谷戸の奥に一人佇んでいた。一匹のアマガエルがゲッゲッゲと鳴きだしたかと思うと、沸き上がるような合唱となり、やがてふっと消えていった。一瞬の静寂の後、自動車の音が近づいて来てまた遠ざかっていった。ヨシがかずかに揺れ、草いきれが鼻をくすぐった。出そうである。

青白い光がふわりと浮き上がり、横へ移動しながらまもなく樹冠へ消えた。

出た。

午後７時４５分。いくつもの青白い光が、ゆっくりとした明滅を繰り返し、水路の上空を舞い始めた。

その日の昼間も、同じ場所にいた。さほど広くもない谷戸の中ほどから奥に向かって、放棄水田跡に成立したヨシ原が延び、周囲はスギ林とコナラ林に囲まれている。林の縁に沿って崩れかけた素堀の水路が流れ、水面は所々でミゾソバやセリに覆われている。谷戸の中ほどから下は水田が広がっている。水田脇の水路は泥上げ等の手入れがなされているものの、幸いなことに素堀のままである。水底を覗くと指でなぞったようなカワニワの足跡が、いくつも走っている。いかにもゲンジボタルのいそうな環境である。農作業をしていたオジサンに「ここに、ホタルはいますか。」と尋ねてみる。「昔はいたんだけどねー。今はもういないよー。」よく聞かされる返事である。

「もういない。」といわれた場所でも実際に調査に入ってみると見つかることがよくある。たしかに農薬散布と水路のコンクリート化で激減したり、絶滅した場所は多くある。しかし、その後の農薬の規制強化や激反による放棄水田の増加で、細々と生息していたホタルが回復してきている場所もまたいくつもある。

「昔はいたけど今はいない。」のではなく、「昔はホタルを見に行ったけど、今は見に行ってない。」もしくは「昔はホタルの飛ぶ時間に、ホタルのいる場所を歩くことも多かったけれど今はそんな機会ほとんどない。」といった、ホタルへの無関心や生活様式の変化も、ただでさえ少ないホタルをさらに少ないものにしている気がする。

今日もテレビの映像がこぼれる窓の外で、車のヘッドライトが行き交う車道脇の水路のまわりで、細々と光りつづけているホタルがいる。

（本社自然環境調査室・宮畑貴之）